
学園祭ワルツ

あや/小町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園祭ワルツ

【Nコード】

N2335I

【作者名】

あや／小町

【あらすじ】

「聖葉女子学園」3本目。

放浪の画家だった父とともに世界各国を旅してまわった晶にとって、なかでも特にゆかりの深い国はイタリア。

家族同然の付き合いをしている家庭もあり、その家の息子とはほとんど幼なじみである。

自由奔放なあの晶が、全寮制の、しかもお嬢さま学校だなんて大丈夫なのだろうか。うまく馴染んでいるのだろうか、辛い思いはしていないのか？

幼なじみの青年クラウディオは晶を案じ、数少ない一般解放の機会である学園祭にやってくる。

「ここでの生活が君を不幸にするのなら、このまま君を連れて帰るよ」

尾崎晶高校一年生。夏のはじめの物語。

1頁

「やだ、あれ、尾崎さま？」

「そのようよ」

尾崎晶がその男を連れてホールに入ってきた時、既にそこに集まっていた生徒たちはざわめいた。

「一緒にいるの、誰っ」

「知らないわ」

聖葉女子学園、学園祭。一般開放日のことだ。

全寮制の聖葉女子学園では、良家の子女を集めているとあって、普段学園内の部外者の立ち入りは非常に厳しくチェックされる。

その聖葉に唯一入れるチャンスが、この学園祭なのだ。

一般開放日とはいえ男性の入場は厳しくチェックされるので、実際のところ中へ入れるのは生徒の家族、それも生徒本人からの招待状を持ったものに限定される。

いつもはスポーツカジュアルが多い晶も今日は特注したワンピースを着ていた。ワンピースとは言っても、中に仕込んだパニエと幾枚も重ねたオーガンジーでふんわりとボリウムを出しているので、ドレスと呼んだほうがふさわしい。

晶が伴っているのは、すらりと背の高い白人青年だった。

濃いハチミツ色の金髪に柔和な顔立ち。晶と交わしているのはイタリア語だった。

「誰、あれ」

その姿を一目見るなり、晶の友人でありルームメイトでもある高橋妃穂が低くつぶやく。

その隣で、奇しくも似たようなことを言うものがある。

「誰です、あれ」

同じく高等部一年生の、桐生園子であった。

妃穂は色白の丸顔といい、ふんわりした栗色の髪といい、アンティークドールを思わせる美しい少女だが、園子のほうもまた感じの違う美少女だ。

色白の肌によく映えるまっすぐな黒髪には艶があり、それを結わずにそのまま背中に垂らしているところは、聖葉の制服よりも豪華な内掛けなど着せたらさぞかし似合うだろうと思われた。

妃穂と園子はどちらもそれぞれに目立つ美少女なのだが、その境遇にも似た部分があった。

まず二人とも、名家と呼んで充分に差し支えない家の娘である。

初等部からずっと聖葉の寮暮らしをしているところも同じだ。

もっとも、高橋家は主にその資産額において、良家の子女が多いこの学園内でも群を抜いており、桐生家はその家の歴史において同じように抜きん出ている。

園子は視線を感じたようにふと横を向いた。

そしてかすかに顔をしかめている妃穂と目があうと、つんと勢いよくそっぽを向いた。

高橋妃穂と桐生園子。

似たような境遇だからさぞかし仲がいいのかと思いきや、二人は初等部に入學した当時の犬猿の仲なのだった。

ふああ、と晶はワルツをゆったり余裕をもって踊りながら生あくびをもらした。

眠くて眠くて仕方がない。

なにしろ昨夜は一睡もしていないのだ。

続いてもう一回あくびが出る。こちらはなんとか噛み殺した。晶の目尻に涙が浮かぶ。

「疲れてるの？」

クラウディオ・ジェローザが聞いた。晶は淀みないイタリア語で返す。

「まあね」

「寝てないの？ 昨日」

「うん、そう……」

晶はいかにも大儀そうにごくゆっくりとまばたきしている。

それを見てクラウディオは思った。これは、相当に眠いのだな。

晶とクラウディオとは、子どもの頃からの仲良しだ。

今は亡き放浪の画家、晶の父がよくクラウディオの屋敷に呼ばれて絵を描いていたせいもある。

幼なじみ同然の彼だから、少し話せば晶の体調や機嫌はすぐに汲み取れる。そして眠い時の晶に何を言っても、無駄だということも。

しかし、ワルツを踊る晶の足の運びに乱れはない。

相当踊り慣れている体の動きだった。

その何割くらいが自分とのダンスなんだろうと思いつながら、クラウディオは重ねて聞いた。

「なんでまた、そんなに寝てないのさ」

「昨日前夜祭で……森だったからさ……」

「前夜祭で、森？」

踊りながら、クラウドイオは首をかしげた。

なんのことかさっぱりわからない。

「うん……『森』だからね……」

しかも、やっぱり晶は相当眠気が勝っているようで、要領を得ない返事しかしないのである。

クラウドイオは、また首をかしげた。

『森』って、なんだろう。

聖葉の学園際、一般開放日のクライマックスは、なんといってもこのダンスパーティーである。

パートナーのいる女生徒はそれにふさわしくドレスアップして、普段は会えない父や兄、それに婚約者と踊る。

それはめったに会えない恋人たちの逢瀬でもあり、父や娘、兄と妹など、家族同士のスキップの場でもある。

聖葉に預けた娘がどんなレディに成長したか確認するのは、彼らにとってもなかなか嬉しいことらしく、父と娘、兄と妹というカップリングでワルツを踊っている姿がそこかしこで見られる。

「盛り上がっているようですこと」

晶がクラウドイオと仲睦まじそうに踊るのを、奥歯をキリキリ言わせながら見ていたが、ややして身を翻した。妃穂はその凄い形相を、肩越し振りかえって見たが、特になにも言わなかった。

「調べましたよ、高橋さん！」

しばらく戻ってこなかった園子が、出て行ったときと同じ勢いで帰ってきたのは、数曲分時間がたったころだった。

妃穂は今日の学園祭に誰も呼んでいないし、はじめから誰とも踊る

つもりはないようでむしろ潔く制服を着用しているが、園子は目の醒めるような濃いブルーのドレスを着ている。肘上まである絹の長手袋をはめてフォーマルな装いだ。

その手袋をはめた手でスカートの裾をつまみ上げ、園子は妃穂の横に滑り込んでくる。

園子本人も決まったパートナーはいないのだが、事前に内々で『園子さん、うちの兄がどうしても園子さんと踊りたいって』『うちの弟が……』『うちの従兄弟が……』などと頼まれ、いくつもダンスの予約が入っているのである。

だがそんなことは今彼女の頭から飛んでいるようで、園子は踊りたさそうにしているものの視線をはなから無視して言った。

「あの彼の正体わかりました」

「ええっ?!」

まさか彼女が自分にそんなことを言ってくるとは夢にも思っていなかったのだ、妃穂は目をぱくりさせた。

だが園子は、足掛け10年に及ぶ確執のことなど頭からすっ飛ばしたように妃穂の隣にびったり並んで言う。

「招待客名簿を見たんです。誰だと思えます?」

「だ、誰だったの」

「名前はクラウディオ・ジェローザ。イタリア人ですね。わかったのはこれだけですけど、これだけわかれば上出来です。見た感じ、かなり若いですね。わたくしたちと同じ年くらいかしら。……高橋さん、あなた尾崎さんからなにか聞いていないんですか」

「……なにも」

妃穂は、園子とホールで踊っている友とを見比べた。

「……聞いてないわ」

いつになくしょんぼりと、妃穂はつぶやいた。

晶がドレスを注文しているのは同室だから知っていたし、誰か招待するつもりなのも知っていた。

『どなたかお呼びするの？』

晶の父が既には知っていたから、そう訊ねたところ、彼女は『うん、父と放浪してた時代、お世話になった人』

と言ったのだ。

その笑顔があまりに朗らかで屈託がなかったせいで、保護者代理人かそれに準ずるような立場の人物だと勝手に思い込んでしまっていた。

亡き晶の父は、画家だった。

彼は世界各地を放浪しながら絵を書き続けた人で、彼が亡くなるまでの15年間、晶も父とともに旅してまわっていたのである。

だから晶の答えを聞いた時、もっと年のいった、それこそ父と同年代の男性を思い浮かべたのだ。

それがまさか、あんなに若くて背の高い青年だなんて。

「ま、仕方ありません」

と園子が言った。

「高橋さんのせいではないわ」

その台詞に、すぐ横で聞いていた茨木が目を向いた。

茨木貴子は、黒のヘアバンドで額を涼やかに出し、銀縁眼鏡をかけている。主の妃穂がドレスを着ないので彼女もいつもと変わらぬ格好だ。

茨木も初等部一年生からずっと妃穂と一緒に聖葉暮らしたから、この二人の犬猿ぶりはよく知っている。

妃穂が園子の前でこんなにあからさまに落ち込むことも今までになかったが、それにも増して、園子が妃穂にやさしい言葉をかけるなど前代未聞のことだったので、耳を疑った。

晶のパートナーへの動揺からか。それとも『森』の疲れのせいか。と茨木は考えた。

どちらにしても、滅多にないことだった。

「そういえば小さい頃さあ」

「え？」

「初恋だったんだよね。あたし」

「なに、今なんて？」

クラウディオ・ジェローザは軽く聞き返した。今、なんて言ったの？
晶はその台詞を日本語で言ったからだ。

「うちの父さんとお宅の父さんは友だちで仲良しだったから、あたしたちも子どもの頃からちよくちよく会ってたよね。いつ会っても、どんな時でも、あなたはあたしにやさしくしてくれた」

「ちょ、晶。日本語はわからないよ。イタリア語で言つてよ」
しかし晶はそのまま日本語で続ける。

「どんな時でもあたしをレディとして扱ってくれたよね。あたしを守ってくれようとしてくれた。父さんと一緒にいろんな土地に行っただけど、あなたほど大切な男の子はいないよ。今でもだよ」

「だから日本語は……晶、君、わざとやってるの？」

クラウディオは、晶の顔を覗き込んだ。晶の心の奥底を見つめるように。

そして声に重みをもたせて言った。

「晶、さみしいの？」

「え？」

晶は目をぱちくりさせた。

その目は普段よりいくぶん腫れぼったい。それはもちろん眠さのせ

いなのだが、見ようによっては泣き腫らしたようにも、見える。

「僕が今日来たのはね、晶。君のことが心配だったからだよ」

「ふぁ？」

晶は半分あくびまじりのあいづちをうった。

「ここでの生活が辛いようなら、とけこめないでさみしい思いをしているようならこのまま連れて帰ろうかと思っていたの。イタリアへ」

帰る、という言い方を彼はした。

幼なじみであり、いとこのようにも感じられる晶。

その晶が成人するまで、ジェローザ家で面倒をみてはどうかという話は両親の間でも出た話だし、クラウディオにも否やはなかった。

「本気だからね」

去年の冬のはじめだった。晶の父が死んだのは。

父ひとり娘ひとりで、とても仲のよい親子だった。

その父を亡くし、自ら選んで聖葉に入学することを晶は決めた晶。

本人が決めたことだから、心配はしても反対はしなかった。だがクラウディオの目から見て、今まで晶がつむいできた日々の暮らしと聖葉の生活とはあまりに違う。

メールで晶は、楽しかったこと、嬉しかったこと、クラスメートたちとのたわいのないやりとり、規則違反をして怒られたことなどを生き生きと伝えてくる。

だけど、ほんとに？ほんとに元気なの？

クラウディオはそう思う。

機会を見つけて一度直接様子を見に行かなくてはいけないなと思っていた。

そして、自分から見てやっぱり無理しているようなら、どんな騒ぎになってもいいからその場で晶を連れて帰ろうと心に決めていた。

「イタリア……？」

晶はもやがかかったようなあいまいなまなざしで答えた。

「そう、イタリア。ぼくんち」

クラウディオは微笑を浮かべた。

「だって、お嬢さま学校なんて。晶に似合うと思えない」

「そっかな……」

むにゃむにゃと、晶はつぶやく。

クラウディオは瞳に力を込めて続ける。

「社交界のくだらない催し事も上品ぶった女の子も、僕は嫌い。もつと言えはそんなところに君を置いておきたくない」

「そう……捨てたものでもない、よ」

晶は小さく今では仲間となった学友たちを弁護したが、クラウディオはさらに言った。

「どうする、晶？ 僕と一緒に来る？」

晶はぼやっとして答えなかった。

クラウディオはもう一押しする。やさしい笑顔を浮かべて。

「イタリア。ぼくんち好きでしょう、晶」

晶は釣られたように淡い微笑みを浮かべて答えた。

「うん、好き……」

談笑しながら踊るふたりを、妃穂はしょんぼりと眺めていた。

そんな妃穂を慰めたいのだが、なんと言葉をかけたらよいかかわからない。

茨木はもどかしい思いで妃穂を見つめる。

茨木にとってみれば、妃穂は大切な大切な女主人である。

物心ついた時から、自分は彼女に仕えるものだと思われ、言い聞かせられて育ってきたし、自分自身でも彼女に仕えることは決していやではない。

有能な従者であるためには、主人以上に主人について知っていなくてはならない。

だからこんな時、妃穂の心の内も茨木には手に取るようにわかるのだけど、わかるからこそなにも言えないという場合なのだった。

励ますことも慰めることもできずに口ごもる茨木の横で、口を開いたのはまたしても園子だった。

「尾崎さんのあの性格ですもの。言わなかったのは単にくわしく聞かれなかったから、ただそれだけのことでしょ」

「そうなのかしら……」

「そうに決まっています。深い意味などあるものですか。……ちよつとあなた、しゃんとしたらどうなんです！」

パン！平手で園子が妃穂の肩を叩いた。

「しよげている暇はありませんよ。調べごとはこれからなんですから」

「……これから？」

園子は大きくうなずくと、茨木を指して言った。

「この人を使うんです」

「私、ですか」

茨木が目をぱちくりさせて、指で自分の鼻を指した。
そうですと園子がまたうなずく。

「茨木家は、単に高橋家に仕えているわけではない。高橋家のデーターベース……当の高橋家でも把握していない部分に至るまで握っている、そういう役目がある。そうですね。そして茨木の一族の中でも高橋家当主に仕えるものは、代々16歳になると自家の資料をすべて知る権利が与えられる……茨木貴子さん、あなたの誕生日は先月の15日。でしたね」

そう言って園子は茨城をまっすぐ見た。

その瞳が輝きを増していた。

「あなたにも、もうその権利は与えられているはず。それを使ってあの男の情報を検索したらいいんです」

まさか否定はさせませんよというように、園子は口元を吊り上げた。なまじ整った顔でそんな笑い方をするものだから、妙に迫力がある。

やはりこの桐生園子という人は油断がならない。と茨木が小さなため息をつくより早く妃穂が返事した。

「いいわ」

えっと、茨木が妃穂の顔を見た。

妃穂の目が据わっている。

「茨木を、発動させましょう」

発動させましようって……。

口にはしなかったが、内心茨木が驚いたほどの決断の早さだった。普段妃穂は、データベースとしての茨木の役割を人に知られることをひどく嫌がっていたからだ。ましてや自分以外の人間がその力をどんな形であれ、使うなんて。

「この男性のこと、調べてちょうだい、茨木」

園子が手にしていたメモを彼女の手からとり、それを妃穂は茨木に渡してよこす。

ほとんど条件反射のような従順さでそれを受け取りながら、茨木は、おやおや……と思っていた。

それ以外、なんとも感想の持ちようがなかったのである。

『森』の疲れもなんのその、という様子であった。

茨木が自分のノートパソコンを使って調べものをするのを、園子は目をらんらんと輝かせて、妃穂は更にその横で覗き込んでいた。

液晶画面を凝視していた園子がふと息を飲んだ気配がして、妃穂は彼女のほうを向いた。

園子はきれいな顔をこわばらせている。

「大変……この男」

「ついに『この男』呼ばわり？」

妃穂が言うのを園子は無視して続けた。

「一歩間違えば王子さまです、この男」

ええっ、と妃穂がのけぞった。

「なぜ、どうして」

「わたくしの家は古い家だから、同じような家のことはだいたい頭に入っているのです。イタリアのジェローザ家。この家系は遡っていくとサヴォア家傍流のひとつにあたらずはずです」

「確認しました。桐生さんの記憶の通りです」

茨木が言うのに、園子は大きく頷く。

「やっぱりね」

いつまでも沈黙している妃穂に業を煮やして、園子が苛立たしげに声を大にした。

「わからないんですか、高橋さん？」

「ロマンチックねえ」

「そうでなくて」

「わかるわ、サヴォア家くらいわかるわよ。イタリアの名家であり旧家の流れよね。でもわたくしがわからないのは、なぜそれが『大変』なのかってことで……」

「ああもう！」

園子は床に座ったまま、膝をばたつかせて器用に地団太を踏んだ。絹糸のような黒髪が背中で跳ね踊る。

「あなたやっぱりボケボケしていますね、高橋さん！ たったひと晩くらい寝なかっただけでだらしないですよ、未来の高橋家当主が！」

「わたくし、寝不足には弱いので……」

妃穂が気恥ずかしそうに返す。

「晶とおんなじ……」

「聞いてません」

園子が細い眉をひそめてぴしゃりと言い返した。

「わたくしたち自身について考えてみたらわかることでしょう。次期当主となる名家・旧家の、年頃の若い女性でまだ婚約者の決まっていないものが、家族や親戚以外の異性を公式の場、しかもダンスパーティーでパートナーとして扱うことが、どういうことになるか」

「……」

それを聞いて、妃穂の顔色が次第に青ざめる。

自分に当てはめて考えることで、ことの次第がだんだんリアルに感じられてきたのであった。

「わかってきました？ まあ、聖葉の学園祭が公式の席かどうかは横へ置くとして……でもあのホールには今、生徒だけでなく父兄もたくさんいらっしゃるんですよ」

「そうだわ……そうだったわ」

ようやく頭がまわってきた、というように妃穂が少し早口になった。「でしょう。今この時、あのホールは立派に社交界の体を成していると思いませんか？」

「思う、思うわ。しかも正式な婚約者を発表するときによく使う手よ、それは！」

「だから大変だと言ったんです！」

園子は眉をひそめて言ってしまったから、ふと考え直したように首をかしげた。

「尾崎さん、お嫁に行くのかしら」

「えええーっ！っ！」

妃穂が両手を口に当てて声を裏返らせた。そして、眠気が完全に吹っ飛んだはつきりした口調で言った。

「まさか、晶が」

「ああいう人の方が意外に結婚早かったりするんですよ、高橋さん」二人とも微妙に失礼なことを言っているなと聞いていた茨木は思ったが、そこは言わずにおいた。

妃穂はパソコンの画面から視線をあげて、呆然とつぶやいた。

「イタリアに嫁入り……」

園子は既に開き直ったように、妙に落ち着いた言い方で言った。

「尾崎さんとイタリア……似合い過ぎます」

「ラテンなところ？」

妃穂が振り返って訊ねたので園子は答えた。

「ほかに、どこが？」

「あの……晶」

「なに」

答えはぶっきらぼうこの上ないが、彼は気を悪くせずに続けた。気にかかることは別のこと。

「僕にはその……そろそろ危険信号が点滅してるように見えてるんだけど。あの。きみの様子が」

「なに、危険信号で」

踊りながら晶は答える。

「危険で、どこが」

「だから、そういうとこだってばー」

クラウドディオは、困ったように苦笑した。

「あのね、君はね。眠たいときとお腹すいてるときは危険なの」

「あー……?!」

濁点つきの発音で言われてしまった。これは相当レッドゾーンだと判断したクラウドディオは、少し声を落としてやさしく言う。

「少し休んだら？ 眠たいんでしょう。良ければ僕のこと枕にして、どこかで30分くらい寝たらいいと……」

「寝る?!」

晶は大きな声を出した。

「寝る、あたしとあんたが、寝る!!」

「ちょ、声が大きいです! それに、そういう意味じゃないよ!」あわてて周囲を見回したクラウドディオであった。だがイタリア語だったので、その会話のきわどさに気づいたものはいない。

「寝るのは無理なんじゃないの?! 寝る? あたしとあんたが!」晶は彼の言うことをほとんど聞かずに、上機嫌とも見えるくらい、大きくのどをのけぞらせた。

「ははは、そんなことできるくらいなら12のときに振られてない

つてのさー」

「だから！」

晶の台詞をさえぎるようにクラウドディオが言った。その頬にはうっすら赤みがさしている。

「そういう意味じゃないって言ってるのにもう、たちが悪いんだから……。それにあの時のあれは、僕は君を断ったんじゃないって……。と、そこまで言いかけたクラウドディオは、少しあごを引いて改めて晶の顔を見直した。

その目付きはまるで潮の流れを読む漁師のように真剣だった。

言いかけた言葉を引っ込めて、彼は言いなおす。

「やっぱり、休む？」

「なんでさ」

「だってそんなにふらふらして。そういえばずっと踊りっぱなしだったよね。疲れ……」

「そんなことない」

晶はクラウドディオの手を自分からしっかり握りこむと、自分の左手をまっすぐ肩の高さに伸ばし、右肩を中心にしてその場でぐるぐる回りはじめた。

回る向きはクラウドディオのほうで背中回り。つまり晶のリードということになる。

「ワルツじゃないでしょそれは。こら晶、どうどう」

「あたしは馬じゃない」

「馬のほうがまだ少しはいうこと聞くよ」

クラウドディオは苦勞して晶の回転を止めさせようとしながら、そつと溜め息をついた。

どうしたらいいんだ、これは。

3頁

「……少し席をはずしている間に、ずいぶん楽しそうじゃありませんか、あのふたり」

ケラケラ笑いながら踊る晶と、やさしく苦笑するクラウディオ（…という風に、はたからは見えた。彼のしつけのよさと礼儀正しさのおかげだった）を見ながら、桐生園子は言った。

妃穂は機嫌の悪さを露骨にあらわして言う。

「なに。晶、あんなやさおとこがいいの」

ちろり、と横目で園子が妃穂を見た。

「やきもちで目がくらんでいますよ、高橋さん。あれは公正に見てなかなかの上玉だと思います」

「そうかしら」

やはり納得がいかないというように妃穂は眉をひそめたが、そのとき一段と優雅な曲が流れはじめた。二人は揃ってスピーカーのあるほうを見上げる。

「ラスト・ワルツね」

「そうですね」

口調こそ静かではあるものの、園子の瞳は再び獲物を狙うような鋭い輝きを見せはじめていた。

曲がはじまって、晶とクラウディオとは離れる素振りを見せない。実際には単に晶はそこまでまわりが見えておらず、クラウディオは晶が暴走しないように制御するので精一杯で、こちらまわりに目をやる余裕がなかっただけのことなのであるが、傍目には『別れを惜しんでラスト・ワルツを夢中で踊る恋人同士』であるかのように見えた。特に、妃穂と園子には。

「だめー」

たまりかねたように大声で言いながら飛び出して、晶のわき腹に前のめりで体当たりしたのは妃穂であった。

えっ、という顔で園子が、自分の右隣とホールにいる妃穂を見比べる。

なにが起きたのかわからない、と言いたげであった。

「ぐはっ」

思い切り、全体重をかけてタックルされて、晶の首から上がブレる。それには構わず、妃穂が声を裏返らせてまくし立てた。

「いやです、最後はわたくしとです！」

ホールで踊っていたものが足を止めてしまうほどの大声であった。

「ひ……妃穂、さん」

茨木が、止めたそうに手を途中まであげた格好で固まっている。だがもう遅い。

「ちょっと、ずるいわよ、高橋さん！」

ぐはっと、再び晶がうめいた。妃穂の反対側から同じく勢いよく園子がぶつかっていったのだ。

「最後はわたくしと踊るのよ、尾崎さん！」

「だめよわたくしと！」

妃穂が言うのに、園子がふふんと鼻で笑う。

「制服のまま、なに言ってるんです。わたくしは一応ドレスですから」

「関係ないわ。わたくしは晶のルームメイトよ」

「それこそ関係ないわよ」

「どいて下さい」

「いやです」

二人は晶を挟んでバチツと火花を散らした。

「な……」

晶は、今ようやく目が醒めたように小さく頭を振った。きつく目を
つむって、開いて。つむって、開いて。

「なに、やってんの、二人とも？」

「だいたいあなたが邪魔なんです！」

妃穂と園子、奇しくも二人の台詞が重なる。

二人とも手を伸ばし、目の前にいるクラウディオを押しやった。晶
を奪い返すように両手で抱きしめながら園子が言う。

「家柄がなによ。南シチリアなんて19世紀まではスペイン領だっ
たところじゃありませんか！ 桐生家の歴史は8世紀にまで遡れま
す、サヴォアがなんぼのもんですか！」

妃穂も負けじと息を吸い込む。

「わたくしは高橋家の次期当主となりますのです、総資産額ではこちら
のほうがはるかに上だわ、あなたなんか晶にふさわしくありません、
お下がりなさい！」

「妃穂さん……」

ダンスフロアの外側でそれを見ていた茨木は、ついに両手で顔をお
おってうつむいてしまった。

ラスト・ワルツを踊っているものは既に一組もおらず、音楽だけが
むなしくホールに鳴っていたが、二人はなおも続けた。今度は晶に
向かって言う。

「晶！」

「尾崎さん！」

「は、はい」

「結婚してはいや！」

「はい？」

きよとん、と晶が首を傾げるが二人はかわるがわるに言い続けた。

「そうよ、いつかはいいけど今はいや！ それに、あなたが絶対幸せになるってわかってる相手じゃないとわたくし許さないから！」

「大体尾崎さんにはもっと筋骨隆々でたくましいタイプが合うと思います。そんなひよろひよろしたのでは物足りないです！」

「考え直して、晶。ヨーロッパの一般貴族なんてね、税金と城の維持費だけでカツカツなんですから。そんな、苦労するってわかってるようなところだめよ！」

音楽は鳴っているものの、妙にしいんとしてしまったホールで次に口を開いたのは、晶だった。

「……あんたらさあ」

うんざりした口調で言いながら、きつくしがみついているふたりを交互に見る、その視線は冷たい。

「一体、なにを勘違い？」

くつと、肩を震わせて笑い出したのはクラウディオだった。

軽く握った拳を口元へあてがい、くつくくくくとさもおかしそうに笑う。

いきなり突き飛ばされて、いったんは目をぱちくりさせた彼だったが、晶に翻訳してもらわなくても大体の雰囲気で少女達が言っていることに察しがついたらしい。

笑いすぎで目尻に浮かんだ涙を指で拭い取りながら、おかしそうに、そしてどこか嬉しそうに言った。

「ほんと、仲良しだね。聞いてたとおり」

本当は妃穂や晶の部屋で話をしたいところだったが、寮内は全面男子禁制なのでそういうわけにもいかない。

妃穂に園子、晶とクラウディオ、それに茨木の5人は来客用の応接サロンで話することにした。

応接サロンは一階の来客用出入り口の脇にあり、一段低く造られているせいで廊下を通るものからよく見える格好になっていた。

そこに、茨木がしずしずとお茶を運んでくる。

「あのねー……」

サロンのソファの背もたれに、晶は片肘を預けて、斜めに腰掛けている。

ドレス姿だというのにその行儀の悪さ。だがそれを咎める者はいない。

妃穂と園子は向かい側のソファに並んで、膝をくっつけて神妙に座っている。

クラウディオはというと時折イタリア語で隣の晶に話しかけては、その答えに背中をまるめて笑ったり、納得したようにうなずいたり。茨木が各々の前に麦茶のグラスを置き、妃穂の隣に腰をおろしたところで晶が再び口を開いた。

「ふたりとも、あたしがこいつのところに嫁に行くって思ったの？」
妃穂と園子は顔を見合わせた。

「だってそれしか」

「ないかと思って。ねえ」

「頼むよ」

晶は、これ見よがしなため息をついた。

その晶に、クラウドディオが言う。

「場の雰囲気から、ひょっとしたらとは思ってたけど……晶、僕が来ること言ってなかったの？」

「そうだっけ」

言ったような気がしたけど、と伝法なしぐさで耳の後ろをかく晶をクラウドディオがたしなめる。

「皆さんがこれだけ驚いてるってことは、ちゃんと君が言ってたかったってことなんじゃないの？」

ううー、と晶はうなった。

「それはダメでしょ、晶」

「うーん……」

「それは、誰でもびっくりしちゃうよね」

晶の肩に軽く手を添えて反省を促すクラウドディオを見て、3人は納得した。

ああ、これは恋人ではない。

どちらかというと、これは保護者に近い。

「あのねえ、そんなことできるくらいなら、あたしは12の時にこいつに振られてないよ！」

えっ、と妃穂が驚いて口元を手で覆う。かわりに園子がずいど身を乗り出した。

「振られたんですか。なぜ」

「乱暴者だから？」

情け容赦なく言う美少女二人に、晶は本格的にむくれた。

「かもね！」

横を向いて口を尖らせる晶のことを、茨木はじつと観察していたが、やがて少し浅く腰掛け直してクラウドディオへと向き直った。

そして彼に直接話しかけた。

茨木の口から出たのは、ゆっくりめの、きれいな発音の英語だった。「晶はあなたに振られたと言っています、それは本当でしょうか」

？」

妃穂と園子がふたり揃って、あらっという顔をした。相手がイタリア人なら英語で意思の疎通をはかることも可能なのだということに、今気づいたらしい。

果たして、クラウディオも聞き取りやすいゆっくりした英語で茨木に返した。

「残念ながらそれは本当です。はい、僕は晶に告白されて断りました」

「こちらのお二人は、晶が乱暴者だから振られたのではないかと言、彼女はそれを否定しないのですが、それも本当ですか？」

「それは違います」

クラウディオが、静かな微笑を浮かべて首を横に振った。

「晶がはっきり答えないのは、僕の立場を考え、そしてそれを守ろうとしてくれているからだと思います」

「その立場とは、と伺ってもよろしいでしょうか？」

隣で晶が心配そうにクラウディオを見ていたが、彼は臆せずに先を続けた。

「それは多分、晶に説明してもらったほうがいいでしょう。ねえ晶？ あの時、僕はなんて言って断ったんだっけ？」

向き直られて晶は押し黙った。言いたくないのだ。

自分の辛い思い出のためにではなくて相手を守るための沈黙だと、その様子を見ていた茨木は思う。

視線をそらし沈黙する晶に、しかしクラウディオは笑顔で促した。

「教えてあげて。きみを心配している彼女たちに」

「言わなくなっているのに……」

晶はやはり言いたくないようであった。

だがクラウディオは笑顔のまま、しかしきっぱりと首を横にふる。

「今回のことではずいぶんと騒がせたようだからね。彼女たちへは説明義務があると僕は思うよ」

「……」

「言って」

「あー……」

彼の気持ちが変わらないのを見てとって、晶は片手を首の後ろへ揉むようにあてがう。

しばらく迷った末に、晶は小さな声で言った。

「女は、いやなんだ」

「え？」

「なんですって？」

妃穂と園子が身を乗り出して聞き返した。本当にわからないという顔で。晶は早口のイタリア語でそれを言ったのだった。

「こら。それはズルでしょう」

ごく軽く、晶の頭をやさしく叩いてクラウディオは言った。

「ちゃんと日本語でどうぞ」

「気持ち嬉しいし、晶のこと、大事な友だちだと思ってるからうちあけるけど、実はぼく、女の子が苦手で」

今度こそ日本語で晶は言った。淀みのない口調は、その時の彼の言葉をずっと忘れていなかったことをあらわしていた。

「だから気持ちには応えられない……って言われたの。12の時、告白したその場で」

妃穂と園子はどちらからともなく互いに顔を見合わせた。

「ゲイね。ゲイなのね。」

その瞳が雄弁に語っている。

そしてほぼ同時に、示し合わせたようにクラウディオを見た。

聖葉高等部一年生の、美少女筆頭二人組に見つめられて、クラウディオはにこっと微笑み返してみせた。

その笑顔は、それだけの美少女に向けるにしてはあくまで『愛想のよさ』の域を超えない代物だったので、二人はなんとはなし、納得したように彼から視線を外した。

「そりゃあショックだったけど、それでもあたしはやっぱりこいつのことが好きだったし、友達は友達だって思っていたし、そんなことでせつかくの二人の関係をだめにもしたくなかったから……」

晶は少し目を細めた。かすかに笑っているように、茨木には見えた。「仕方がないから、もう、それ以降ずっと友だち」

そこまで聞いて、妃穂と園子は二人ともほっとした顔を見せた。それを見咎め、すかさず晶が言う。

「なに？ あんたたち、嬉しいの？」

今までとは一転して、険しい口調だった。晶の目の下がかすかに引きつっているのは、寝不足のためと怒りの前兆、両方からである。

「一応あたしにとってみれば初恋だったしさ、けっこうなハートブレイクメモリーなわけなんだけどさ。なに？ 嬉しいの？」

「え……」

「ねえ……」

ふたりは気まずそうに再び顔を見合わせる。語尾を濁らせて沈黙するのが、肯定を意味していた。

晶の目がよりいっそう細くなる。今度は過去を懐かしんではない、怒りのためだ。

「ひどくない？！ ひどいよね！！」

雷が落ちる。

晶は妃穂と園子を順々に指差しながら、烈しい声を出した。

「あんたたち二人ともそこに正座して！ それから……」
じろりと後ろを向いた。

サロンの段差のところで、低い手すりに半分隠れるようにして顔を覗かせていた同級生、先輩、それに中等部生たちがあわてて顔を引っ込めた。もちろん晶はそれを見逃さずに声を張り上げる。

「そこで覗き見してるの、あんたらも全員正座！　こら逃げない！」
びしびしびしと女の子たちを叱りつける晶を見て、クラウディオは子ども時代を思い出したように半眼になって目を逸らした。そしてそっとイタリア語でつぶやいた。

「晶の雷落とし、健在だな」

気の毒に、と肩をすくめるがその顔はやさしい。

「怖いんだよね、これがまた……」

晶のことが心配で日本までやってきてみたが、無用な心配だった。彼女はここで、ちゃんとやっている。イタリアにいたときと同じように、うまく。

見に来てよかったと彼は思った。

これで安心して帰ることができる。

クラウディオは、床に並んでちょこんと正座している二人を見た。

妃穂も園子もどこかしらほっとしているような、嬉しそうな表情である。

それを見て、彼は思った。

いざとなったら本当に晶をイタリアに連れて帰ろうと思っていたけど、その必要はなさそうだなと。

昔は本当に女嫌いで、話すのも嫌なくらいだった自分だけれど、晶のおかげで今ではそれがだいぶ軽減された。

昔から気が弱くて女の子に意地悪されていた自分を、何くれとなく庇ってくれて、一緒にいてくれた晶の事が好きだった。

今も、ずっと。

もしどうしても結婚しなければいけないとしたら晶がいいなと思っ
ていることや、相手が晶ならこれからの人生きつと楽しいだろうと思
っていることなどは言わない方がいいな、とクラウディオは叱ら
れている少女たちを微笑ましく見つめながら思った。

でないと、またひと波乱起きそうだから。

3頁（後書き）

西欧でちょっと見場のいい男はたいがいゲイです、と誰かが言っていました、イタリアはそのなかでもゲイ率の比較的低い国だそうです。

ですがそこで自分の性癖に気づいたクラウディオは、余計に肩身が狭かったものと思われます。

晶「しかもお姉さん3人いるんだよあいつんち」

妃穂「それは……何というか、お察しするわ」

そんな彼が心を許して話ができる唯一の女の子が、晶でした。そのせいもあって、晶に対しての感情は「どうせ結婚するなら晶がいいな」ではありますが実際には「いとこ」に近い感覚で大切に思っている模様です。

次は、高橋妃穂の犬猿の仲である聖葉高等部でも双壁のお嬢さん、桐生園子をピックアップ。

「もしかして、待ってたの？」

「だって他にもう、ここでしか手に入らないものなんてないし」
『焰』
『ほもろ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2335i/>

学園祭ワルツ

2010年10月9日22時01分発行